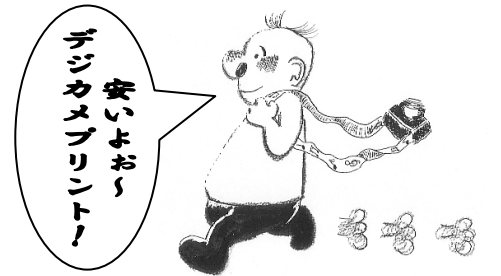


No.13

芥川だより



芥川の写真屋さん

編集発行人 下村嘉明

発行所 着物から服を仕立てます **梵**

高槻市芥川町2-14-3

TEL072-681-8870

発行日 2007年7月20日

ご希望の方にはお送りします

お気軽にお問い合わせ下さい。

e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

「芥川だより」の贈り物



「なんでも続けていると、きっといいことがある」。ある先輩がそんなことをいった。「芥川だより」を一年間つづけてきて、たしかに、さまざまな出会いがあり、人情の機微を味わうような触れ合いがあり、琴線にふれる話を聞いたり、いいことがたくさんある。つい先ごろも、文字どおり有り難いことがあった。それは、いままでにない想像を超えた経験だった。◆一年ぶりに信州から山猿がやってくるという。さっそく山仲間二人をよび、エンちゃんも誘って、小さな宴を催した。話題の中心は「芥川だより」だ。エンちゃんは話題が豊富である。これからも書きつづけて、私たちを楽しませてほしい。紙面づくりの苦労や自慢も含めて、話は尽きない。◆夕刻から飲みはじめて、宴がお開きになって以後も、私は久しぶりに会った山猿と飲みつづけた。話題は「芥川だより」のつづきである。「負けるな！よっちゃん」はこれからどういう展開にしようとか、介護日誌に書けない裏話など語り合いながら、夜更まで飲んだ。

◆翌朝、やはり二人とも二日酔い。朝食をすませ、近々私が信州へ行く約束をして、山猿と別れた。◆そのあと、どうも身体に違和感を覚える。いつもの二日酔いではない。雲の上を歩いているような、何んともいえない違和感だ。そのとき、これは倒れる前兆だなと直感した。「この身体の変調はそうとうヤバイ」と感じて、すぐに家に帰り、横になった。寝ながら、酒とタバコを断とうと心に決めた。一大決心ということではなく、ごく自然にやめようと思った。それを機に、タバコも酒も自然にやめた。よくいわれるような禁断症状もない。一カ月がすぎて、体調がたいへんよくなった。◆思うに、これは「芥川だより」をつづけてきたことへの贈り物だったのだろうか。体の異常を敏感に感じ取れたのも、自然にタバコと酒をやめられたのも、なにか見えざる「もの」の力がはたらいているような気がする。

芥川商店街歳時記

今月の予定

夜市7月28日(土)恒例の芥川商店街の名物祭事

○ 高槻まつり 8月5~6日

深奥幽玄手談の交わり

囲碁で豊かな人生を！

日本棋院高槻支部

芥川囲碁サロン

(株)入谷商会経営

日本棋院棋士谷村義行八段による

大盤解説毎月第二日曜日午後2：30より

指導碁毎月第二日曜日午後4：00より

高槻市芥川町2-10-11(芥川商店街)

TEL・FAX 072-682-0403(代)

「どう元気にしてる」

「降圧剤を飲んで下げてるの」

こんな会話が多くなった。ガンになった人、ボケになった人、ひとしきり話がつづく。身体を大切にすることは大切だが、そればかりでは、ちよつと淋しい。

自分に合った方法で気にせず、のんびりしていたい。それぞれ自分のペースでやればいい、“いい人”をやめよう。「あの人丸くなったね」、背中が、腰が、そうじゃないらしい。

「それだけ歳をとったということよ」私は、彼女のつき出たトゲが好きだった。意見がかみ合わず、やり合ったことも再三、それが丸くなって、私の顔さえわからない様子、はたしていいことだろうか。私は淋しい、そんな彼女に会いたくないけれど、さけて通れない。

大切なことという時は、対等でやり合いたいし、突っかかってくれる位の元気をもってほしい。私自身は、「丸くなった」「かわったね」などとは言われたくない。

歳をとってから、いい人になる必要なんかない。若い時に言えなかったことを、大いにいいたいし、何かで表現したい。自分のペースで言って、口論するのもいいんじゃない。

ことばのむずかしさ

「ああ落ちる、ブルー」。雨の日のひととき、夫婦連れが私の前を歩きつたはよいのだけれど、ブルーブルー、今にも地面につきそうになつて傘をさげて歩いてゆく。「ああ、さっきからいつてるのに」、自分の傘で主人の尻をたたき、「何よ」と振り向くダシナさん。とうとう落下した袋。拾うこともしないで知らん顔。また傘で尻をたたかれても知らん顔。その後方を私がついて歩く。

一組のある漫才師の顔が浮かんだ。あの人なら傘袋を拾って、渡して、デパート中ばやくだろうなあ。ブルースルー。日本語って何とむずかしいのだろう。「傘の袋が落ちるよ、お父さん」とやさしくいえば、袋をさわったかも。思わず笑った一場面である。

地面が濡れているので、気をつけて歩かないと、スッテンコロリとやっってしまう。ころべば、ただではすまされない。手首骨折、大腿骨折、足首ねんざ、待っているのはそのくらいのこと。商店街を歩いても、家の中でも、田圃でも気ばかりつかっていないと、うっかりして歩けない環境である。車には往生しまっせー。ブーという警笛さえならさない。側へスツと来て止まる。振り向けば車がある。そ

れには、それなりの言い分があるらしい。気をつかって頂いているらしい。文句言うのはやめとこう。

雑感 広告の紙で鶴折る 雨日和

世の中には、いろいろな性格の人があるもので、何か他人様から頂いても、それがつまらぬ物でも、とても喜んでくれる人があるかと思えば、逆に何とかなとか、もらったものに文句をつけたり、けちをつけて、いつも不平や文句を言う人もある。あながち個人の性格とだけ言ってよいのか、どうであらう。

年金問題、介護福祉、企業倫理、最近の新聞やテレビをにぎわす四文字熟語。ほのぼのとした話題、あるいは心安まる、明るい話はなかなか見つかりそうにない。いろんな匂いは当分鼻に残るようだ。

想いやり

月に一回は必ず同じバスに乗車する人がある。始発からならんだけれど、若い人は動きが早い。自分が目指している席なんかムリ、皆な自然と座る。柱をもって立つ。ゆれるたびに大きく身体が動く、時には袋が座っている人の肩にあたる。「ああゴメンネ」とあやまる。

よく見ると、まあ若いのに、座席にマタを拡げてすわってござる。こんな娘に誰がした。ガンクロの女性が化粧箱を取り出して、お化粧をはじめた。「何を考えているの、どこまで変わると思っているの」。私も意地が悪い。ジーツと肩越ににらむ。

ことわっておくが、こんな若い人達ばかりいると言っているのではない。中高年も悪い。座りたそうな顔をして席をさがすのをやめて「どうぞ」と手を差し伸べ、あけてくれるまで待てばよい。

日本では、老人や障害のある人へのいたわりが薄くなった。シルバシートではないが、ちよつと見ると、学校帰りが隣の席に靴をおき、道具をおき片足を横へ…、電車の中で見る情景。私はしばらくショックから抜け出せずにはいた。「こんな子供に誰がした」。

私は電車ではシルバシートに座るようにしている。若い奴に座らせる要なし。それでも平然として、寝たフリをして知らぬ顔の半ベエも坐っている。降りる駅が近づいたので「どうぞ」といつて席を立った。私が立ち上がると、前の席の学生が立った。若者として坐っては居られまい。私は振り返って見た。とつても気持ちよかつた一瞬、あの学生も思いやりの心があつたのかと…。

五〇キロの荷がずしりと肩にくい込むが、よっちゃんは辛いとは感じない。朝の冷気がすがすがしく心地よい。歩きはじめて十分も経たずに背中が汗ばんできた。積雪一メートル以上ある林道を快調に進む。スキーはワカンと違って、あまり沈まないで、雪中のラッセルは楽である。二時間あまり歩いて、石狩岳の登山口についた。午前中晴れていた空模様が次第にあやしくなってきた。雲のようすは天候悪化のきざしを示している。

夏道どおり沢筋にルートをとる。夏ならば薄暗い林叢の中を進むことになるだろうが、いまは雪が木々をおおっているので、あたりは明るい。傾斜がきつくなる手前で右手の尾根に取りつくことに決めて、そこにテントを張ることにした。

翌朝は曇天、気温はきのうほど低くない。マイナス一五度程度だ。尾根に取りつく。広く緩い傾斜なのでスキーが威力を発揮する。登るにしたがって風が強くなり、サラサラの雪を舞い上げて地吹雪となった。こんなサラサラに乾燥した雪はよっちゃんには初めてだった。雪をよっちゃんには初めて固まらない。つよくにぎってもまったたく固まらない。

「パウダースノーとはこれのことか」と感心する。日本海の湿気をたっぷり吸った剣の雪とはまるで違う。衣類に付かな

いので、溶けて濡れる心配もない。

地吹雪で視界が効かず、地図と磁石をたよりに尾根を登っていく。進む先の様子が読めない。呼吸がしにくく苦しい。地吹雪というのはやっかいだ。次第に尾根がやせて傾斜も増してきた。天候もますます悪くなってきた。気温もぐんぐん下がる。昼過ぎにようやく稜線に出た。地図上で位置確認すると、どうやら一つ尾根を間違えて登ってきたようだ。だが、問題はない。無理をせず、稜線を少し下ったところにテントを張る。

その日、西高東低の冬型の気圧配置となった。西の沿海州にマイナス四〇度の寒気団が居すわり、東は三陸沖に発達した低気圧が台風並となって、日本列島は荒れた。夜になるにしたがって、冬の嵐は凶暴性をあらわにし、北海道を暴れ回った。テントが吹き飛ばされるのではないかと思われほどの暴風に襲われたときは、三人とも起き上がり、テントのポールを押さえた。だれも一言も発せず、顔に不安の色を浮かべている。テントの中は緊張と恐怖が張りつめた。まじりともせずシュラフにもぐっている

中でのパッキングは一苦労だ。キシリング・ザックには二十日分の食糧、石油、ザイルなどの装備、テントを詰め込み、その上に二メートルを超えるスキーの板、ストック、スコップ、テントのポールを括り付ける。テントの含んだ水分とスキー、ストックが加わり、重さは六〇キロ近くなっているはずだ。

稜線に出ると、一段と風が強くなった。ザックの上につけたスキーのせいか、バランスをとって歩くのがむずかしい。風は、目出し帽を通して容赦なく頬を打ちつける。このまま一日歩きつづければ、顔面凍傷になることは間違いな

い。凍傷はやけどと同じで、水ぶくれができて、ただれたようになるのだ。強風のせい、か、いつとき雲が切れ晴れる。とうとうM蔵は動けなくなった。まだ九時過ぎ、きようは三時間しか歩いていないが、S太は音更山の手前の乗越でテントを張ることに決めた。

M蔵は三十九度の熱である。よっちゃんはテントに入ってすぐに、熱く甘いミルクティーをつくった。M蔵はティーをすすりながら抗生物質を飲み、寝袋にもぐる。よっちゃんもS太も寝袋に入って、昼寝を決め込むことにした。

M蔵は「寒くて眠れない」といって、よっちゃんにすり寄ってきた。「ほんまにおまえはホカホカするな」といいながら、寝袋を寄せてくる。よっちゃんは湯たんぽのように温かいらしい。

ルートツ(三)

タケシの父、すなわち僕の曾祖父が、宮城の中学の校長となって六年目に、悲惨な事故が起こった。折りしも、スペイン・インフルエンザが世界的に猛威をふるい、日本では四十五万もの命が失われた年である。

秋の深まった十月の後半、中学四、五年生(現在の高校一、二年生にあたる)約一五〇名と引率の教諭四名が蔵王越えに挑んだ。誰一人蔵王を登った経験はない。軍人でもあるリーダーの教諭は軍隊式に一五〇人の生徒を四分隊にわけ、さらに四つの小隊に分けて、行動させることにした。

出発の朝、空模様はあまりかんばしくない。しかし、天候悪化のことなど念頭にかすめもしない。食糧は握り飯一個と餅一切れだけだ。一六小隊に分けられた一行は六時半に青根温泉の宿をあとにし、速いスピードで登っていく。九時頃に小雨が降り出す、風はない。リーダーの軍人教師は、雨風などにへこたれるなどばかりに、軍隊の強行軍よろしく速歩でぐんぐん登っていく。先頭を行く小隊が最高峰の熊野岳に達する昼頃、天候が激変する。突然風がよくなつて、白いものが混じ

りはじめた。休憩する間もなく、最高湯に向けて下っていった。けつきよくこのとき、軍人リーダーと一人の教諭を含めて全体の五分の四、一三小隊は無事下山するのである。

この頃しんがりの小隊は頂上より手前の物見山あたりを歩いていった。一陣の冷たい風がヒューと吹き雪が無いはじめたと思っている間に、たちまち猛吹雪となった。二人の教諭は三十名足らずの残された生徒たちを励まし、前進をつづける。体力のあまっている強靱な生徒たちには先をいそがせた。やがて彼らは熊野岳に向かって吹雪の中に一人消え二人消えていく。残されたものは吹雪の中でますます体力を消耗していく。死の彷徨が始まった。このころに高湯温泉に下山した先頭部隊は、この危急を知るよしもない。

とくに六人の生徒の状態が悪い。意識がもうろうとし、雪の中に倒れるものもいる。二人の教師は彼らを助けながらようやく熊野岳頂上の岩室にたどり着いたとき、まだ元気な生徒が数人、去りがたく同伴していた。教師は彼らに向かつて、「なんでもいい、元気なやつは先に行け。里に下りたら村人にたのんで、救援隊をよこしてくれ」と、吹雪に言葉をさえぎられながらも叫ぶ。その悲痛な叫びに涙しながら、生き残った最後の生徒たちは吹雪の中を

進んでいった。

その別れ際、「とても駄目かもしれな。責任は重大だ。よし、もうあきらめよう！」という教諭の言葉を耳にした。たいせつな生徒の命が消えようとしている、ともに死にゆくしかない、そうあきらめたのだらう。八人にはもはや生き残るすべは残されていなかった。

この八人の運命に自ら加わった生徒がいた。吹雪の中を突破して安全地帯に達したにもかかわらず、後に残されたものたちの安否を気遣ってひとり引き返したのである。

夜になって軍人教諭は深刻な事態を察し、捜索に出ようとするが、猛吹雪で動けない。翌日高湯では、少年たちが帰らないと大騒ぎとなった。翌々日には騒ぎはさらに広がり、警察署長が指揮をとって、救助隊が組織されることになる。さっそく六十名あまりが救援に向かうが、吹雪は少しもやまず、引き返した。

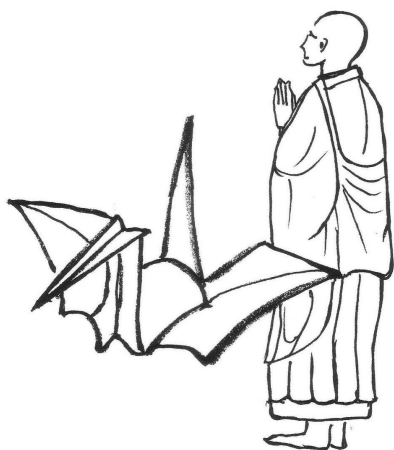
蔵王は荒れつづけ、遺体が発見されるのは三日後であった。頂上の大小二つの岩室の中で九人が抱き合うように絶命していた。発見されたとき、岩室は六尺あまりの雪にすっぽり埋まっていたという。

遺体がおろされた青根温泉には遺族たちが詰めかけていた。生きているよ

うなわが子の面持ちを目の当たりにして、名を叫び、頬ずりする。

この痛ましく悲惨な光景を前にして、タケシの父は決断した、わが心を遺族の悲痛な心中と同じうし、一生かけて亡くなった少年たち、教師たちの供養をしよう。校長の職を辞し、二度と職に就くことはなかった。そんな父をタケシは尊敬していたようだ。だがそれは、富裕な資産家だからこそ可能な生き方の選択だったともいえる。

遭難の事後処理をすませたのち、タケシの一家は東京に居を移した。その後タケシは予科、大学へ進み、卒業の年に山形で式部と出会うことになる。大正十三年の春である。



女学校時代

小学生のころ私は女医に憧れていました。小学校卒業後は、公立の高等女学校、女子医学専門学校に進もうと思っていたのです。その夢を実現させるために一所懸命に勉強しました。夜中の二時、三時まで、父に「もう寝なさい」といわれるまで机に向かっていました。思うように勉強ははかどらず、悔しい思いをしながら、テキストを何度も読み返したものです。けつきよく夢かなわず、女学校は父の勧める、「良妻賢母」を教育方針とする浄土真宗系の学校に進学することになりました。昭和十年（一九三五）のことです。

麹町の女学校への通学ルートは、新橋駅から省線に乗って、皇居のお濠をぐるりと廻るように四ツ谷駅まで行きます。まだ高いビルは建っていませんでしたので、遠くまで見渡せました。そんな車窓の景色を楽しみながら女学校へ通いました。

校門を入ると、まず天皇陛下の御真影に敬礼を致します。右手に薪を背負った二宮尊徳さんの銅像が立っていらつしやる。そちらにも御挨拶をして、靴をはき替えて教室に入ります。

制です。社会、理科、国語、数学、英語などの科目があります。ほとんどの科目は満点か九点の成績でしたが、英語が五点しか採れなかったときはショックでした。それから、どこへ行くにも単語帳をポケットにしるのばせて、歩きながら小声でスペルを発音して単語を覚えようと努力しました。その甲斐あって優の八点を採ったときはほっとしました。問題は理科です。理科の授業は楽しいし、かつ嫌いではありませんでしたが、どうしても優を採れませんでした。

この学校の特徴は宗教の時間があることです。低学年から凝念という修養の時間がありました。週のはじめの一時間目に行なわれます。仏さまに向かっておつとめがあり、仏の教えを学びます。この修養のおつとめが将来私の生活の中心になるとは、そのときは思いもおよびませんでした。

私は修養の時間が好きでしたが、中には退屈で居眠りしてしまう人もありました。すると、先生が廻ってきて背中を棒で軽くパシッと叩いてくれる。ハツとして眠気が覚めるのですが、それがなにか清々しい感じでした。

女学校時代を楽しくすごし、五年の月日がまたたく間のうちに過ぎました。卒業をむかえる昭和十五年は、日中戦争が泥沼化し、ヨーロッパでは第二次大戦が勃発していました。日本が太平洋戦争に突入する直前で、戦時色一色に染まっていたころです。

女学校を卒業するとき、先生から、学内にある家政科という専門課程で三年間勉強し、国家試験にとおれば教師の資格がとれます、その専門課程に入学してはどうでしょうかとすすめられたのです。そのすすめで入学することに決めました。家政科には、北は北海道、南は鹿児島、宮崎、熊本と全国からいろいろな方々、また台湾、韓国の方などもみえました。その人たちのほとんどは、寄宿舎に入って学校に通います。衣食住の専門課程を勉強する人たちの姿は、たいへん真摯に感じられました。

夏休みが近づいたころ、九州のお友達から九州めぐりをしないかというお誘いを受けたのです。「行ってみたい」とすっかりその気になり、十六年の夏休みは、友だちの誘いに乗って九州旅行に出かけました。最初は鹿児島のお友達に十日間、次は宮崎のお友達に十日間お世話になりました。鹿児島も宮崎も、私の想像をはるかに超えた自然の美しさに感激です。

そして朝のおつとめに参詣です。朝六時に梵鐘がならされます。ぜんぜん環境の違うお友達のお寺にたいへん興味深く感じました。

枕崎で十日間お世話になり、宮崎の澤山へと旅立ちました。宮崎のお友達の家でもたいへん歓迎され、接待していただきましたのです。名所旧蹟地にもご案内いただき、楽しい夏休みを過ごしました。

六六年前（昭和十六年）の夏、枕崎と澤山で過ごした日々を懐かしく振り返っています。



川柳

真本嘉代子

- 印押して外科医に命助けられ
- 縁ありて十五の乙女虹を見る
- 何思うオイ！青蛙友いるか

編集後記

梅雨も明けて本格的な夏が今年も来ました。山に海に有頂天になった頃が懐かしく思える歳になりました。せめて夏の思い出になるように浴衣を新調しました。皆さん今年の夏の行事は如何ですか。暑さに負けずに頑張りましょう！（嘉）

◇魚あれこれ◇

タコ(蛸) ②

周防春日丸

あなたは茹でたタコの足先を切つて食べますか? 「タコは足の先を切らないと……」と言いませんか。

雄ダコの八本の足(腕)のうちの一本は交接腕(生殖器)になっている。チラミンという毒素がある。触手であるがために何でも触ることから不潔になりやすく、足先に付着したゴミなど取れにくい。味覚・衛生面からもあまりよろしくないというところから、食べる前には必ず切り落として、ということになる。こちらで、切らないで食べるという人はいないはずである。

簡単なタコの雌雄の見分け方とは、雌の吸盤は比較的小粒で揃って並んでいるのに、雄は吸盤の大きさにも大小があり不揃いで、並び方にもばらつきがある。交接腕の先端には吸盤はなく、他の足(腕)とは違っている。

ちなみに吸盤の数というと、孵化直後の仔ダコには一本の足に三〜四個を持ち、親ダコの吸盤は二百個程度だそうである。

では交接腕の見分け方とは。タコの眼を下にして足(腕)をそろえて上下四本にすると、漏斗管(しおふき)の下右二番目の足(腕)が交接腕である。

タコの足(腕)は眼の下から右左に数えるのである。この足(腕)には先端から付け根まで白い筋(精莖)がついている。

他の見分け方としては、内臓のあるタコの胴(鰓)を、漏斗管の上からのぞくと、雌は左右に輸卵管の先端、雄は左には何もなくて右に陰茎の先端が見えるので分かるというのであるが、残念ながら見たことがない。

タコはアサリなどの二枚貝は、吸盤で貝殻を引っ張って貝柱を引きちぎり中の身を食べる。またカニなどは八本の足(腕)で包みこんだのち、チラミンという毒素を出して弱らせる。

こうしてタコは八本の足(腕)を使って抱きしめ、絞めつけ、吸いあげるという。自分の体重の二十倍のものも吸引すると言われている。

時期にもよるが、雌のほうが柔らかくて美味しいとされている。雌雄ではなく足が太く短くしつかりしたものを選びていただきたい。

タコのぬめりや臭みは塩もみをする事できれいに取れる。米ぬかを使ったり、塩を入れた洗濯機で取る方法もあるらしい。生での刺身、洗いなどの調理には、足の吸盤をまな板に吸いつかせるとやりやすくなる。

ところで、誰もが知ってる「食べ合わせ(食い合わせ)が悪い」という相性の悪さがタコにもある。よく言われるのは「ウナギと梅干」、「てんぷらとスイカ」など、組み合わせはいろいろ。他には「タコに夕顔」、「タコに蕨(おあらび)」というのもある。まさしく、所変われば品変わるである。



冷えは万病のもと
健康は身体を温めることから
あなたは YOSA に座るだけ

YOSA (ヨサパーク) ののか

高槻市芥川町2丁目24-5
ジョイライフマンション203号室

TEL 072-684-2220

お気軽にお問い合わせ下さい



YOSAPARK ののか

<http://yosa-nonoka.com/>

芥川だよりを

いつも「愛読」していただいている皆さま

暑中お見舞い申し上げます

編集スタッフ一同



お中元にお薦めします

高槻からお出かけの時には、**摂津峡漬**をお伴にして下さい

摂津峡漬は酒肴、お茶請け、お茶漬にご好評です。

伝承製法の摂津峡漬は昔から砂糖を使わない珍しい「なら漬」で、
塩味と酒粕の調和が醍醐味です。

贈って安心もらって重宝！！真空パックのご進物好適品

角容器 中サイズ 9入り 6000円

箱入り 真空パック大 1入り 1050円

箱入り 真空パック大 2入り 2100円

箱入り 真空パック大 3入り 3150円

真空パック 1入り 小・中・大 600円～

(税込み価格)